



ぴよぴよ様

愛用ミシン: JQ460

幸せの音

私が小さい頃、母は洋裁の仕事をしていた。ご近所の方から注文を受け、小さな子のワンピースやスカートなどを作る。一枚の布が注文主のサイズに合ったサイズに切られ、形のあるただの布がミシンの小気味よい音につられて、あっという間にスカートやワンピースに変わる。ミシンの音を、魔法の音楽のように私は思っていた。同じ速さで刻む優しいリズムが小さなパワーをくれて布を素敵な服へと変身させていく。あの心地よい音が大好きだった。

昭和から平成が変わっていく中で母の洋裁の仕事は少しずつ減っていった。洋服店も増えだし、安く買えるファストファッションも流行りだした。布を買う方が高くつくようになり、私が大きくなる頃にはミシンと洋裁台は物置の隅で静かに出番を待っているだけになった。人の物もたくさん作っていた母だったが、私の絵本バッグやシューズ袋、給食袋も全て手作りだった。母が選んだ優しい色合いの布に綺麗なミシン目が並んでいる。そのミシン目の一つ一つに母の愛が縫い込まれているようで、嬉しかった。

私の結婚が決まった時、母はまず一番に「花嫁道具としてミシンを買いにいかない？」と言った。縫うことが大好きな母はまず私に良いミシンとの出会いをさせてあげたいと思ったようだった。地元にあったジャノメの専門店にはかなりの数のミシンが置いてあった。私には、なにがなんだかさっぱりわからず、値段で選んでよいのやら、使いやすいそうな大きさを選んでよいのやら、戸惑った。母はお店の人と楽しそうに会話しながら私に説明してくれた。このミシンはこういうものを作る時に向いているよ。このミシンの良い所はこういうところだよ。と一つずつが愛しいわが子のよう

JANOME
100
YEARS
since 1921





な言い方だった。私は母と一緒に、持ち運びができコンパクトであり、ある程度の物を作る能力があり、そして私が将来作りたいと思っているバッグや上靴袋を想像してそのミシンを選んだ。

その後、2人の娘が生まれて、入園や入学の度に新しいバッグや新しい上靴袋を縫った。娘たちは自分たちの好みで選んだ布がみるみるバッグや袋になる姿を喜んだ。そして入園式や入学式に誇らしそうに手作りのバッグを持って行った。今はもう亡き母も、きっと見ていてくれるだろうと娘の嬉しそうな笑顔を愛でながら天を仰ぐ。

母から受け継いだ物がまた受け継がれていく姿は愛を紡いでいく様に似ている。小さかった私が大好きだったミシンの音を、娘たちも目を閉じながら聴いている。あつという間に姿を変えたバッグを飛び跳ねながら喜び長く使ってくれている。母が私にしてくれたことと同じように私は愛を紡いでいっている。家族の愛を紡ぐ糸を、ジャンメのミシンが素敵な音とともに強くしなやかに深くしていつてくれているようだ。

私は時々、母の手作りのバッグを眺める。もう35年も一緒にいるそのバッグは当時と何も変わらず色褪せずそこにいてくれる。ミシン目もはっきりとしていて、私を当時へと連れて行ってくれる。手作りのバッグは親元から離れて巣立っていく子どもを見守ってくれている母からのお守りのようなものだった。

お母さん、今もまだこのバッグを持っているなんてびっくりするでしょう。でも捨てられないの。あの時、手作りの物がどんなに嬉しくて誇らしかったか。ミシンの音の横でお昼寝することがどんなに好きだったか。ミシンの音と包丁の音がお母さんの音であるように、我が家にはお母さんの愛の音が溢れていたね。私の娘たちは、私と同じ様にミシンの音と包丁の音が大好きなんだよ。音がするとすぐに飛んできて「何ができるの」「何作っているの」って。子どもたちにとって、お母さんって魔法使いみたいだよ。魔法の音が今日も我が家を幸せに。40年前からずっと。